



昭和二十九年十月二十五日 初版印刷  
昭和二十九年十月三十日 初版發行

昭和文學全集47  
昭和詩集



著者 高村光太郎  
代表

發行者 角川源義

印刷者 小田茂作

東京都品川區大井寺下町一四三〇

發行所

株式會社

角川書店  
かど しかば しよてん

東京都千代田區富士見町二ノ七

振替東京一九五二〇八  
電話九段〇二二一〇二二四

本文紙 本州製紙株式會社  
クロース 日本クロス工業株式會社  
整版所 曉印刷株式會社  
印刷所 東日本印刷株式會社  
製本所 中央製本所

昭和詩集

昭和文學全集  
角川書店版



目次

尾形龜之助	岡崎清一郎	大手 拓次	大木 實	大木 惇夫	大江 滿雄	江間 章子	植村 諦	上田 敏雄	岩佐東一郎	井伏 鱒二	伊藤 整	伊東 靜雄	石川 道雄	池田 克己	安藤 一郎	安西 冬衛								
西條 八十	近 藤 東	黃 瀛	黒田 三郎	藏原伸二郎	草野 心平	許 南 麒	木下 夕爾	北原 白秋	北園 克衛	北川 冬彦	菊岡 久利	上林 猷夫	河井 醉茗	金子 光晴	片山 敏彦	小野十三郎	尾崎 喜八	小 熊 秀雄	岡 本 潤					
三三	二九	二七	二五	二三	二〇	一五	一〇	〇七	〇五	〇四	〇三	〇二	〇一	〇〇	九	八	七	六	五	四	三	二	一	
田中 克己	立原 道造	竹 中 郁	竹内てるよ	田 木 繁	瀧口 武士	高村 光太郎	高 見 順	高橋 新吉	高 島 高	千家 元麿	杉山 平一	神保 光太郎	白鳥 省吾	城 左 門	釋 迢 空	佐藤 春夫	佐藤 惣之助	笹澤 美明	阪本 越郎					
四〇	三八	三五	三三	三一	二八	二五	二二	一九	一六	一四	一二	一〇	〇九	〇八	〇七	〇六	〇五	〇四	〇三	〇二	〇一			



昭和詩集



軍艦茉莉

「茉莉」と讀まれた軍艦が、北支那の月の出の碇泊場に今夜も錨を投れてゐる。岩鹽のやうにひっそりと白く。

私は艦長で大尉だつた。娉婷とした白皙な麒麟のやうな姿態は、われ乍ら麗はしく婦人のやうに思はれた。私は艦長公室のモロッコ革のデイヴンに、夜となく晝となくうつつと阿片に憑かれてただ崩れてゐた。さういふ私の裾には一匹の雪白なコリー種の犬が、私を見張りして駐つてゐた。私はいつからかもう起居の自由をさへ喪つてゐた。私は監禁されてゐた。

月の出がかすかに、私に妹のことを憶はせ

## 安西冬衛

た。私はたつたひとりの妹が、其後どうなつてゐるかといふことをうすうす知つてゐた。妹はノルマンディ産れの質のよくないこの艦の機関長に夙うから犯されてゐた。しかしそれをどうすることも今の私には出来なかつた。それに「茉莉」も今では夜陰から夜陰の港へと錨地を變へてゆく、極悪な黄色賊艦隊の麾下の一隻になつてゐる——悲しいことに、私は又いつか眠りともつかない眠りに、他愛もなくおちてゐた。

夜半、私はいやな滑車の音を耳にして醒めた。ああ又誰かが酷らしく、今夜も水に葬られる——私は陰氣な水面に下りて行く殘忍な木函を幻覺した。一瞬、私は屍體となつて横はる妹を、刃よりもはつきりと象た。私は遽に起たうとした。けれども私の裾には私を張番するコリー種の雪白な犬が、釘のやうに冷酷に私をデイヴンに留めてゐる——「唳啕！」

私はどうすることも出来ない身體を、空しく悶えさせ乍ら、そして次第にそれから昏倒していつた。

### 四

月ははずする巴旦杏のやうに墮ちた。夜陰がきた。そして「茉莉」が又錨地を變へるときがきた。「茉莉」は疫病のやうな夜色に、その艦首角を廻しはじめた——

## 騎兵

古は鞍山站とよはれた落日の部落である

騎兵は飾られた肋骨を張つて——小太鼓の音につれて大部隊の移動を開始した。

騎兵は飾られた肋骨を張つて——すでに落日の部落へ蟻のやうに潜入した

## その夜

騎兵は飾られた肋骨を張つて——華やかな洋燈の下に古風な圓卓を圍んだといふ。

## 菊

私は明治の稚拙な空氣の中に最初の教育を



受けた。

晝ふかく灯らぬ洋燈。ディヴンの上の黒い猫。そして冷い皿のやうな菊。私はさういふ景物の代表する文明の中に、最初の少女に遭遇した。それは私にとつて、たつた一人の妹だつたのである。不思議にこの妹は突然私の前に現はれた。そして又遽にその姿を消したのである。私は短い日月をこの妹と一緒に過ごした寒い記憶をもつてゐる。しかしその記憶すらも、後年私が一人の少女に遭ふまでは、幾んどよびおこされなかつたほどの、不幸な夢に過ぎないのである。この不幸な夢の中の彼女は、黒い猫を友として端正な容を、曾てくづさなかつた。そして伯林の地圖を表紙裏に刷つた深い藍色の書物を携へて、彼女は獨乙語の稽古に通つた。私は今も覚えてゐる。妹を乗せて歸つてくる、人力車の高い金輪の響を。なぜか私は、その響に Academic なものを感じて、憎んだ。さういふ私の狭い料簡を、賢い彼女は固より知つてゐた。そして愚な私を私に憫んでゐたのである。しかしそれを口に出していふ妹ではなかつた。私はさういふ彼女を二重に憎んだ。

私は又思ひ出す。到来の白雪様を黒い猫に與へてゐる妹の様子を。復、獨乙語では大佐をオペレストといふのですと教へてゐる風變

りなけしきを。そして又私には多くを言はなかつた。

斯様にして妹は、遂に私に親しい口をきかなかつたであらうか。

「お兄様、お兄様、曇つた日でも夜になれば一緒ね」といふ不思議な言葉は、後半私が成長して経験した、ある記憶の錯覺であらうか。

いづれにしても私は、たつた一人の妹をよそに、どの位、徒、な日を曠しくしたことだらう。其後間もなく妹は、當時大阪に開かれた第五回内國勸業博覽會の雑沓の中に行衛を喪つて了つたのである。それなり妹の記憶は私から消えた。そして後年、大佐といふ獨乙語が、大佐と訂正されるまで續いた。私の謬つた記憶を、大佐と正して呉れたのは後年の少女である。

寂しい輪廻の月日は、年毎に冷い皿のやうな菊を重ねた。さうして時代は移り變つた。

(以上「軍艦茉莉」抄)

亞細亞では河を認めます

河は展開の役目をつとめる

私はもう飛躍しない  
卑きに就くばかりです

お尋ねの亞細亞の年齢について、確たるお

返事をさしあげられないことを遺憾に存じます。尤も四川の奥の自流井とか、ガンヂスの流域に發生する鹽生風化物について考へますと、意外に、これで若いのではないでせうか。

なんでしたら、海盤車たちについてお調べになつては如何ですか。所謂、亞細亞では河を認めるといふ例もあることです。河の溶解して搬ぶ地の鹽——炭酸石灰を蓄積してゐる彼女らのことです。ものはためし、さういふことにして一つ、直にあたつてごらん下さい。存外そんなところから口を割らないものでもないでせう。

次に、お示しの波斯灣後宮説につきましては、慇懃に御同意申上げる私を、なにより欣快に存じます。この場合差語アルメニヤノツトが Papilia nannae といふことになりませんか。

Omphalos —— バビロン

それと、萬々おてぬかりはあるまいと存じますが、アバダン島の潮汐恆數をお調べになることも必須の條件です。凡そこの三つのものは絶対のハレムの素数です。

猶、お話のありましたエキステンションの件は、御承知のやうに、波斯語の Daria には河と海との兩つの義があり、これを亞刺比亞語に就いてみましても Daria には同じく河と

海との義のあることです。恐らくさういふところから馬哥李羅氏は、今日のオルムス海峡までを、謬つて河と結界されたのではないかと存じます。

いや、兎角あの邊は厄介な問題の、絶えず紛糾してゐるところです。さういへば前年歸屬問題で、英波間に係争のあつたバーレーン諸島事件も、どうやら湖畔の法王廳まで擔ぎ込んで、一先づ覺がついたらしい鹽梅ですが、どうせ事はこのままには収まりませうまい。どうして、百事これからです。……

(以上「亞細亞の鹹湖」抄)

### 韃靼海峡と蝶

木の椅子に膝を組んで銃口を鼻にする。蒼い脳髓で嗅ぐ煙硝の匂が、私を内部立體の世界へ導いた。

私を乗せた俵は公園に沿うて坂を登つていつた。曇天の下でメリイゴオラウンドが將に出發しようとして、馬は革製の耳を揃へてゐた。しかし私を乗せた俵は、この時もう曇天を墮して坂を登り盡してゐた。

私は遊離された進行に同意する。

彼女は目を眠つてゐた。壁に垂れた地圖に横顔をあてて。彼女の肩を這つて青褪めた韃靼海峡が肩掛のやうに流れてゐた。

流れる彼女の眸子はいつも温つてゐる。併し私は氣にしない。

私は構はずレッスンをとる。

レッスンをとるために歩きまはる。

歩きまはるために、私はちどまる。さういふ私を彼女は始めて笑ふのだ。

微笑がいきなり弾道を誘致した。弾道が彼女を海峡に縫ひつけた。

次の瞬間、彼女の組織が解體するだらう。

穿たれたホールから海峡が落下奔騰するだらう。その氾濫の中で如何にして自分は、自身を收容すべきであらうか。

私は決意した。

銃の安全装置を解す音は田舎驛の改札に似てゐる。

銃を擬して、私はピツタリと彼女をマークした。

すると一匹の蝶がきて靜に銃口を覆うた。

### 玄い石

白く寺領での解答

紅藥燻る運日のこは無量觀。

白天驚絨の石階を映して、宙は白妙の銃よりも遠に猶、密だ。

この壇にあつて、阿僧祇にあそぶ文虎の琥珀の眼は、域中の塵汚を吸ひ盡す。

ここにして十方玲瓏。

而も文虎の鬚筋斗うつは、かの石神の磁石もつがため。

### 左祖

陰氣な沼の後、韃靼仕掛の月が墮ちる……肉柱を嘗めて坊主は、からくり油を注いでゆく……憲兵の龕燈で撫でる門閥、脱法の鍵孔が這ひ廻る……害に火藥は濕り、飛道具の筈がゆるむ……

(以上「大學の雷守」抄)

### 春

てふてふが一匹韃靼海峡を渡つていつた。

### 古きチワワの

### スペイン風の壁

Argent と casta の交流を主題として一面三部より成るタペストリー

銀舍める泥もて固めし古きチワワのスペイン

ソ風の壁。

花咲かざる梨の肌に媚び倚れる月朧き夜の侍儻。

火炎燃えさかる藏氈に仰臥せる奴隷の放恣なる腿に蹴せられたるグラタングラタンの白色。

(以上「羅緞海峡と鯉」抄)

### 丸坊主

テヘランのカズヴィン門でお別れしてから、丸、百年は経ちました。

だが、滯つてはゐない。

極彩色の市場は極彩色で、明後日も一昨日のやうに盛り場は盛り場です。

君コンスタンチンイェフの無花果はトルコマン王朝のやうにその頭部コックに對つて乳熟してゐるし、スミルナの乾肉はヴォルテールのやうに

萎びてはゐるが、哲人の十八世紀のやうに滋養に富んでゐます。

颯はバルシヤの古から希臘ギリヤの民のやうに汚らしいし、羚羊ヒヤクはイランの今も波斯の後宮のやうに差つてゐます。

しやがめる老人は、しやがめる老人のやうに、しやがめる老人で、顛門テンモンをどらせる赤ん坊は、顛門をどらせる赤ん坊のやうに、顛門

をどらせる赤ん坊です。

さうです。時間の斑點はひつきやう空間の羊皮紙から乖離し能はない。歴史は要するに地理に従属すべきです。左様、世紀の長絨氈

は世紀の長絨氈を捲きころがしながらアラーの神の髪ヘアと筋、いいえ惡魔の毛ヘアと縮れをも巻き添へを喰はしてはゐない。ルバイヤットの書誌にして、それはルバイヤットの書誌を出でないし、オーマーカイアムの書記にして、オーマーカイアムの書記を一向に超える

ことはありません。

すべてはデマヴェンドの丸坊主の如く、と

すと丸坊主です。

一と撫で撫でにいらつしやい。

百年の家具

秤はかりや枿はかりや定規達。正確な實際家具が磨損して不正確になる時。

光る櫻の幹が、櫻の樹から分離を遂げ、光る櫻の幹になる時。

のしかかる熊が、のしかかる状態で、のしかかる熊の毛皮になる時。

熱いミルクの表面に皮クワが出来、中年の婦人達の眠尻の小じわをもう寫さなくなつた時。

流れるかういふ時間をくぎつて、私達は百年としていいでせう。

だから、五十年では、ポーカー(火掻き)はまだ眞赤にならないし、

ポーカー(骨牌戯)は、まだ半分も濟んでゐないので。

(以上「坐せる關牛士」抄)

明治三年(1870)奈良市に生る。大正三年大連に於て「亞」に據る詩の開始。昭和三年「詩と詩論」の運動に參畫。爾來、四半世紀を闊する時間を、現代詩の史的發展過程と共に歩んで今日に至る。この間、詩集「軍艦茉莉」「濁ける神」「亞細亞の鹹湖」「大學の留守」「羅緞海峡と鯉」「坐せる關牛士」ほかに隨筆集「櫻の實」を著す。現代詩人會員。大阪家庭裁判所調停委員。羽衣學園講師。



ある心の風景

1

——太陽は見えない。  
しろじろと空に満ちる光體はどこから忍びこ  
んでくるのか、  
その反映は蛋白石いろに海底から放たれ  
ひっそりと眩しい世界である。

2

砕かれた胸像のやうな岩々、  
堅い膚は破られながら  
一つひとつの残片に　なほ天上への想念をこ  
め、  
かうとして高く仰がうとする姿態だ。

3

断崖の下　寒い洞穴に激しい風がたつてゐる

安藤 一郎

4

海原はここに濃碧の衣裳をひるがへし  
雪のやうな薔薇をあつめ、  
押しあげてはいつせいに撒きちらす！  
これら　純白の花束を誰が採るのだらう。

あをあをと兩翼は濡れて、  
波濤のひそかな韻きをくぐり飛ぶもの、  
海鳥よ  
また　磯に寄りそうて囁き合ふもの、  
羽搏いて亂れさわぐもの、  
あるひはちつと貝殻をつつくもの、  
黒々と動く海鳥よ　海鳥よ。

5

雲々は遠い陸地を絶ち切つてゐる……  
（いつこんなところへ來てしまつたのか！）  
鞆のやうに揺りあげられる船にゐて、  
ひねもす　乏しいものを採す漁夫たち。

彼らは深く不思議に嚴かな水中の  
冷たい都市を知つてゐるのだ。

6

玻璃めいた海面を突きぬけてくる両手には  
時々　氷を帯びた魚族や海藻が  
銀線の滴りをひいて捉へられてある——  
けれど彼らは黙つたまんま、踞んでゐるばか  
りだ、  
そしてまたとつぷりと静かな薄明をさして、

獸のやうに沈んでゆく……  
何といふ寂しい生業！

うつとりとした凝視の中で水平線が金の暈を  
なびかしてゐる。

（僕はいま　ほんとうの孤獨になつた。）  
〔思想以前〕抄

新雪

ある夜更け  
ふと永い苦痛から放たれたやうに  
あたりが静かになつた  
底知れぬ疲れを醫す  
新しい眠りが訪れ

私は柔かな世界へ包まれていつた  
その奥深いふところへ  
銀色のほの明りが射しこみ  
遙かな空から

すべて清純なものの上に  
眞白い幾萬の羽根が落ちてきた  
どの扉も閉ざされてゐる  
家の眞中で

いつも美しく燃え上る水よ  
私はそこで透ほつた青春の影を見よう  
私はそこで若い海の響きに耳を澄まさう

### 十六ミリの海

あ こつちへ駆けてくるのはあのひとかしら  
濡れた砂に映る雲々を蹴飛ばして

あのひとの兩腿が波の沫で見えたり隠れたり  
それはあまりに遠い あまりに近い

\*  
ガラスを割つた

白いマヌカンのやうに  
彼女が浮び上る 忽ち

波の兩腕から

彼女はもがき出す  
レースの裾飾りを

一杯にひろげて

\*  
一枚の水平線を上下に揺らし  
快走艇はたつぷりと濡れてゆく

可愛い鷗が胸毛をひたすやうに

\*  
ヨットの櫓に雲々が絡めるアルファベット

美しい飾り文字を讀んでみたまへ

“Nephtis”——あれは誰も消すことが出来  
ない

波は笑つてゐる ニグロの前齒のやうに  
青い「時」の莢から弾けて

\*  
ビーチ・パラソルの村々で

彼等はジブシー族のやうに眠つた

タオルの肩掛 腰に手をおくカルメンもある

\*  
落日カスターネットを鳴らす海

時々 汽船は大きなナキノホンになるね

\*  
砂濱に作つた二つのマスクが崩れた

夏は僕たちをブロンズ色に焦がして  
夕方 細長い半島の方へ遠ざかる  
(以上「靜かなる炎」抄)

### 夜の河

私は倒れていた いや

百年の眠りに落ちていた  
無限の 滑かな斷層に

私は 誰からも遠ざかり  
どこにも繋がることなく  
ひとり 黒い淵に浮んでいた

ただ 私の身の下から

絶えず流れの音がひびき  
遠く 幻しの時間に續いていた

そうではない もつと大きな  
瀑布のやうに轟く  
虚しい寂寞がひろがつていた

これが私の生か 存在か

世界の中で 意識しているのは  
私一人であつたのか

私は死んでいた いや  
一瞬の目醒めに聴いていた  
耳近い 夜の河の囁きを

#### 四十二歳

既に 私の肩からは  
匂う粉のようなものは剝がれた  
ひとは 言うだろう  
私は少し老いて 硬くなつてしまつたと

私の内部 見えない隙間を  
日に日に崩れてゆくものがある  
しかもなお

私は 柔かな朝の光りを乳のように飲む  
ひとは 知らない  
私の真下で 瓦礫に碎かれている苦惱を  
時々 若い幻影を見上げて  
うつとりとする この眼を

果して かつての私に  
花咲いたことがあるだろうか  
いつか 一つの實りとなり

自分のまわりを豊かにしようと夢見たのに

あゝ ひとを愛し ひとに愛されることを  
ひそかに希う歎び——  
私は それだけで生きている  
少し老いて 硬くなつて

#### ボジション 15

樹々は おのずから返く  
夕かげりの中に  
長い 織地のような影を伸ばし  
夜の方 移つてゆく

(樹々は 存在を消したのではない)

晝の光りに きつちりとかこまれて  
微塵のような明暗に  
浮き上る エッチング  
あれは誰かの意識に焼きつけられた!

樹々は 闇の奥へ沈む——  
かつての幻像とは 全く別なものになつて

私が見つめていると  
彼等は ひとかたまりのおぼろな構成の中で  
密かに息つき 何かを話す

彼等の囁きは 私の言葉だ

時々 星の瞬きや月明りにあらわれるのは  
樹々自身ではない  
そこに隠れている 私の思想なのだ  
樹々の叫び 樹々の悲しみ  
それらをみな 私は知つているから

#### ボジション 24

冷たい朝が来ている  
處刑臺のように

#### ボジション 30

重い 重い僕の體は  
調理臺の上の 大きな肉片のように  
悲哀の條を露出している

重い 重い僕の頭の中に  
鉛の花が咲いて  
それは かつと開いたまま 萎みもしない

重い 重い僕の怒りの上——  
落日の海へ クレーンの黒い腕が吊り下る

重い 重い僕の睡眠と

崩れた建物の煉瓦の割れ目に 啼くこおろぎ

重い 重い僕の生酔い

重い 重い僕の熱病よ

ボジション 32

—車輪の夢—

私は どこかで 幾度も見たことがある—

夕暮の 海に近い砂濱に 雑草の蔭に半ば  
埋れて 錆びたまま ずつしりと沈んでいる  
古い車輪を

私は知っている あの車輪が動きだすとき

夜の深い潮の下で 次第に目醒めるように  
あれは ひそかに回轉を始めるのだ あれ  
は 透明な霧のような渦を描いて だんだん  
早く旋るにつれ 微音をたてながら 軽快に  
宙へせり上つてゆく……

すると あたりの空気が不思議に桃いろめ  
き 黄金に燦めく灯が點々と滲みあらわれ  
遙かな雲に 幻しの都市が浮んでくる 花や  
料理皿や 銀器の反射や ささやき 匂い  
華やかな衣裳 それらの中から 管絃のひ

びきが流れて 私の肉親と友だち また昔の  
戀人など 互いに微笑みながら そこを往來  
している

そして車輪は 翅をおふる蝶のように 屋  
氣樓の間をあつちこつちへ翔びめぐり めつ  
たにない愛の充足に 狂喜して 永いこと忘  
れなかつた完全な速度の再現を うつとりと  
酔い楽しんでいたので

だが 私は知っている あの車輪がひそむ  
ところを

詩人の住む荒地の隅に ただ一つ残されて  
灰色の砂に 刻一刻 めりこんでいるのを  
(私には あのずつしりと厳しい重みが分  
る！)

ボジション 31

—断面—

燃える地平線

巨大な眼のある山

透おつた都市

分解されたマスカン

立つている卯

紅い蝶

プラスチックの匙

曲つたピン

寢臺の上の拳銃

考える猫

そして

一本の糸のように細い陰影

(以上「ボジション」抄)

明治四〇年(1907)東京芝佐久間町に生る。東京外  
語卒。昭和五年、處女詩集『思想以前』出版。詩と詩  
論。その他著書。ジョイス『ユリシイズ』翻譯を完  
成。米澤高工助教授を経て、昭和一六年東京外語助教  
授となる。昭和一八年、詩集『静かなる炎』上梓。昭  
和二一年から約六年間、「リーダーズ・ダイジェスト」  
の編集に携る。昭和二六年、西脇、村野、北園と詩誌  
「GALA」を刊行。今日に至る。また同年、詩集  
『ボジション』刊行。昭和二九年、ベルギーに開催さ  
れたビエンナーレ國際詩學會議に出席。現職、東京外  
語大教授。著書、譯書多数。



死と生と

一ツ

二ツ

落梅

その濕つた音の

向うに

地軸の撓たがうような

海鳴

いや

千萬の豚が

最後の絶叫を上げるような

風の

どよめき

さよならも言わずに

この世から消えて行つた

友らの

ひっそりした

死

池田 克己

掌に掬うて

その無音に

語らせねばならぬ

その死

瀬戸際の

火薬の

臭いについて

いや

あの殺意について

鼻さきで

燻る

パイプ

ガラス戸の中の

黄色く弛んだ

皮膚

この皮膚に溜つた埃

それは今日

東京で

新築のビルディングから降つてきたやつだ

その埃を

あのとき何気なく眼にしていたが

今は

憎悪が募るばかりだ

もうこの世のものでもない

かけがえもない友らの

皮膚を撫でた奴は

誰か

その意味のない死の

意味に

愛は

狂うばかりだ

坐つている

壘の上に

敷えている

刻々の

無償の

生の集積を

静かな

落梅の音

キエンと金屬的に

響く

風壓



どんより馬の眼に

映つている風景

彎曲した二本の地平線

地平線の接点に

どろんとたまつている涙

馬の眼は何も見えない

馬の眼は映しているだけだ

一つの地平線には

巨大な鐵骨トラストに支えられた

透明な器の中に

海水が満ちている

その底に赤錆びた艦が沈んでいる

全滅した魚類の屍があたり一面に凍結してい

る

波一つ立たぬ海面の表面張力

一つの地平線には

氾氾たる遊絲

交尾した蝶が

遊絲の中を

狂つたように舞うている

可憐な野草が

桃色の花瓣を

しどけなく天にひろげている

馬は

時折り

懶惰に

まばたく

旗 ガラス 鐵屑 人の顔 寶石 七首 び

ラ 電柱 犬の尾 額縁

馬の眼は

どろんと涙をためて

無感動に

映している

彎曲した二本の地平線上の

一切を

手の「時」

打撃は右の手にあつた

愛撫は左の手にあつた

左右の手の空間で

洒れてしまった湖水

洒れた湖水の泥に貼り附いている

魚介草木

かつて

湖水に懸つた虹の色を

右の手は忘却した

左の手は忘却した

今はただ

魚介草木の骸が記録する

洒れた湖水の「時」を

残酷な消耗の「時」を

物を捨てる右の手

物を捨てる左の手

（以上「二つの眼」抄）

## 東京第四番

道だけがあつた

眞直ぐだつたり曲つていたり

昔のままの道だけがあつた

錆鐵の山はもう私に語らない

瓦礫の谷はもう私に語らない

地を這いずるトタンの家はもう私に語らない

彼の經驗や彼のためいきや彼の灯はもう私に

語らない

眞直ぐだつたり曲つていたり

道だけがあつた

私は道で思い出を呼び覺し

私は道で彼に肩を叩かれ